



## 研究調査報告

海外神社跡地から見た景観の持続と変容

# 旧満洲国国都新京(長春)の海外神社跡地調査

津田良樹

(非文字資料研究センター研究員)

2012年3月6日から11日にかけて旧満洲国の国都新京(長春)において海外神社跡地調査を行う機会を得た。調査参加者は本学特別招聘教授馬興国、法学部教授橋川俊忠と私である。6日に瀋陽に入り11日に長春から帰国するというスケジュールで、その間に瀋陽から長春への移動もあり、6日間の旅とはいえ、実質的には7日一日が瀋陽、9・10日の二日間が長春の調査であった。瀋陽では遼寧省檔案館における資料調査、長春では旧新京神社、旧満洲国建国神廟、建国忠霊廟の現地調査が主目的であった。馬興国先生にお願いし、遼寧省檔案館・旧新京神社・建国神廟については事前に許可をいただく目途がついていたが、建国忠霊廟については中国空軍の管理下にあり極めて難しいとのことであった。

瀋陽での3月7日はまず遼寧省檔案館に同行願った馬先生の案内で、王崎研究員を訪ね、遼寧省檔案館を案内していただいた。しかし、なにせ中国の檔案館であり、所蔵資料については自由に目録をくり、資料を閲覧できる状況にはない。資料を特定した上で、あらかじめ閲覧の願いを出しておかねばならないようであった。それでも、どのような資料群が所蔵されているのかの当たりをつけ、稀少本である『遼寧省檔案館蔵日文資料目録 上、下』を手に入れることができた。また、満鉄時代の資料が一部翻刻されており(相当に大部なものである)、それを購入することが可能であることもわかった。

その後、建国忠霊廟とは機能的には近い陵墓建造物である清朝第2代皇帝ホンタイジの昭陵の諸建築の見学をおこなった。昭陵の中心部方城の四隅に角楼をもつ城壁や隆恩殿を中心に東西に配殿を配する建物配置は建国忠霊廟の建物群と共通点があるようである。また、牌楼など建国忠霊廟がデザインモチーフにしたのではないかとと思われる建物も確認した。8日にはかつての満鉄に乗って瀋陽から長春入りした。

長春での3月9日は、偽満皇宮博物館前副館長の李茂傑氏の案内で、まず旧新京神社に向かった。旧新京神社

は、旧境内が現在吉林省人民政府高官の子弟の幼稚園と長春市政府高官の子弟の幼稚園とに分割して使用されている。いずれも党幹部達の子弟の幼稚園であり、敷居が高く内部はこれまで見学できなかった場所である。6年前、塀の外から肩車され盗み撮りした記憶がよみがえる。<sup>(1)</sup> 警備は厳しいが旧境内地に無事入ることができた。社殿で残っている部分は拝殿とかつて本殿へと繋がっていた幣殿の一部である。外観は切妻造で木造の破風板や垂木などが残り、かつての面影を残している。とはいえ拝殿の建物だけが時代から取り残されたかのように、周囲を取り囲んで建てられた園舎はパステルカラーで彩られメルヘンチックな様相である。旧拝殿内部にも入ることができたが、残念ながら昨年大改修が行われたとのことで、真新しい床・天井が張られ、柱を赤、壁面や長押を白で真新しく塗装され、園児達の遊戯場に変身している。そのため、拝殿時代の様相を伺う痕跡もほとんどない。

ついで、旧満洲国皇帝溥儀の宮廷府(現、偽満皇宮博物館)では建国神廟の跡地の補足調査を行った。6年前には大急ぎで実測したこともあり、未確認の箇所があったためである。また、建国神廟に造られた「天照大神防空壕」を確認するという目的もあった。南面していた社殿の礎石群の背後、東西ほぼ対称的な位置に地面から角状にコンクリートで造られた出入口が突き出していた。このコンクリートの施設は地下に造られた「天照大神防空壕」に降りる階段の覆いである。本来は出入口付近まで土で覆われ、陵墓などでしばしばみられる土饅頭の如くなっていたものと思われる。「天照大神防空壕」は緊急時に御神体などを避難させるために秘密裏に造られた地下壕であると判断される。内部を確認したかったのではあるが、内部はまだ未整備であるとの理由で許可されなかった。

10日は早朝から旧建国忠霊廟に出かけた。旧建国忠霊廟は中国空軍の管理下にあり、周囲には空軍関係の宿舎や学校が建っており、周辺を日本人が徘徊すれば目立





建国神廟跡地

社殿の基壇・礎石がかつての社殿の規模を伝えている。その背後両脇に三角形に角を突き出したような施設が地下壕（「天照大神防空壕」）への出入り口である。かつてはその間にみえているコンクリートの塊部分も含めて、土饅頭状に土に覆われていたであろう。



氷点下 17℃ の朝もやの中に建つ旧建国忠霊廟回廊内の現在の様子。奥に見える大きな建物が旧祭殿である。重機による瓦礫の撤去作業の最中であった。

つだらうからとの配慮のためである。また、旧建国忠霊廟内に住みついている廃品回収業者が一日一度外に出るのだそうで、その時に当たれば内部をのぞき見ることができるのではないかと馬先生の情報に期待をかけての行動であった。旧建国忠霊廟に着くと、なぜか閉ざされた回廊の正門である「内門」の扉が開いていたのである。開いている扉から中を窺うと、重機でトラックにゴミや瓦礫の積み込み作業を行っている最中であった。住みついていた業者の持ち込んだ瓦礫などを撤去しているのではないかと想像された。それをいいことに目立たぬように密かに回廊内部の写真を撮影したのであった。後悔が残る結果となるのだが、さすがに、空軍の管理だということで、入れるところならどこまでも入りこんで撮影するという、いつもの行動をとることはばかられた。その後、回廊の外から見ることもできる霊殿などの撮影を行っていると、早くも公安の車が近づいてきた。住民から通報があったのかもしれない。早々にその場を立ち去ることにした。その後、かつての参道などを確認すべく、建国忠霊廟時代の地図を頼りに探したが、変貌が激しく難しい状況であった。それでも、地元の人達から話を伺ううちにかつての状況を知る老人にいきつき、その老人の案内で廟務所跡、廟務所から大同大街（人民大街）に通ずる道、さらに大同大街に面して開く「側門」のふたつの門柱が残っていることを確認することができた。

旧建国忠霊廟は空軍が管理しているとはいえ、現在は荒れるがままに放置された状態である。仄聞によると旧建国忠霊廟を重点文物として保存する動きがあるやに聞く。<sup>(2)</sup> 保存されることはよいことだが、しばしば中国で行われる旧状を無視した無神経な修復が施される恐れを

感ぜざるをえない。修復が行われる場合には事前に本格的学術調査がなされることを期待したい。そのほか新京忠霊塔跡地なども確認したが、忠霊塔は跡形もなく軍関係の学校となっている。考えてみれば、神社や忠霊塔の跡地は、戦後まったくフリーな未利用地となったわけであり、中国では多くの場合、軍や政府機関が接取することになったようである。そのため、神社や忠霊塔跡地などの調査は、軍や政府機関の制約との戦いにならざるをえないという現実と直面することになっている。

そのほか、日本の城そのままに造られた旧満洲国の実質の支配者であった関東軍司令部の建物がそっくり中国共産党吉林委員会に衣替えしている様相を驚きをもって実見した。権力の移行を赤裸々に示すという権力者の政治的意図はよくわかるが、その意図の中には民衆がいく感情や民衆からの視点は全く欠如していると感じざるをえなかった。体制の実態を端なくも露呈しているとみるのはあまりにもうがった見方であろうか。

- (1) 「旧満洲国の『満鉄附属地神社』跡地調査からみた神社の様相」（『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化 第4号』2007年3月）の際の調査。
- (2) 帰国後に分かったことであるが、建国忠霊廟は1987年に吉林省級文化財に指定されているようだ。しかし、管理者である空軍側はそれを受け入れず、「文化財認定」板の設置も拒否しているのだという。（周家彤「長春市における『満洲国』遺跡群の諸様相」現代社会研究科研究報告、第7号、愛知淑徳大学大学院現代社会研究科、2011.3）